



第210号

発行所

一般社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会

〒606-8315
京都市左京区吉田近衛町
TEL 075-751-2713
FAX 075-752-4015
E-mail: info@shirankai.or.jp
http://www.shirankai.or.jp

主 な 内 容

- ② 新任あいさつ
- ③ 第4回地域連携の集いを開催
- ④ 校友会・KMSIFUNDだより
- 支部だより「岐阜」「阪神」
- 人事異動会員計報

医学研究科長 就任あいさつ



医学研究科長・
医学部長
伊佐 正



このたび医学研究科長・医学部長を拝命し、令和4年10月1日に着任致しました伊佐正でございます。着任にあたり、芝蘭会会員の皆様にご挨拶申し上げます。

私は他学出身（東京大学医学部昭和60年卒）で、母校での大学院、スウェーデンへの留学、母校の助手、群馬大学の講師、助教授を経て、愛知県岡崎市にあります大学共同利用機関の生理学研究所に教授として約20年間務め、7年前に京都大学医学研究科の教授を拝命しました。この4年間は岩井一宏研究科長のもとで組織管理担当の副研究科長を務めるとともに、世界最先端拠点の高等研究院ヒト生物学高等研究拠点（WPI-ASHBI、斎藤通紀拠点長）の副拠点長として、研究拠点の申請、採択後の立ち上げに関わるといふ貴重な経験もさせていただきました。

専門は神経科学の基礎研究で、人間を含む高等霊長類で特に発達している手の巧緻運動や、意思決定、学習、意識などの脳内メカニズムの解明と脳や脊髄に損傷が起きた際の機能回復について、ヒトの近縁種である霊長類を用いて研究を進めて参りました。このような研究には実験動物としてサルが必要ですので、20年前にサルに関するナショナルバイオリソースプロジェクトを立ち上げ、京都大学に異動するまでの13年間、課題管理者を務め、ニホンザルを繁殖し、国内の研究者に提供してきました。このような活動に対しては、動物実験に反対する団体から様々なアクションを受けることがあります。そこで、動物実験の重要性を広く理解していただく広報活動をしたり、5年に一度の動物愛護管理法の改訂に際しては、行き過ぎた管理によって医学研究が損なわれないよう

に実験動物学の先生方とともに、政府や国会議員に働きかけるなど、普通の基礎医学研究者は余りされないような少々泥臭い仕事にもたずさわって参りました。

また、自身の専門分野である神経科学に関しては、各学会が別々に国に働きかけるのではなく、コヒールメントボイスを出すことが必要と痛感し、脳科学に関連する基礎・臨床・心理・工学系の30学会が連携する学会連合を10年前に立ち上げました。

禍からの回復です。コロナウイルスの感染拡大からほぼ3年が経過しようとしています。この間の行動制限のために、人と人が接する機会が大きく損なわれました。教授会もオンラインでの開催が続いていますし、学会活動、海外渡航も制限されました。教授同士でも、最近着任された先生方とは実際に顔を合わせたこともな

だいていますが、相談件数が想定を遥かに超えて多くなっており、京都大学医学部も「コロナ禍におけるメンタルヘルス問題」と決断して無縁ではないことは明白で、丁寧な対応が必要と感じています。

クティブでの海外留学も停止していましたが、学生を送る先の確保も含めて復活・拡充させて参りたいと考えています。一方で、この間に整備が進みましたがバーチャルな会議システムなどは上手に活用し、今後も対面とオンラインを使い分けて仕事の効率化を進めていくことも重要と考えています。

キーワードは「異分野連携」と「人材育成」

話は変わりますが、京都大学に赴任してまず印象的に思いましたことは、皆さんが「京大らしさ」ということをしばしば

コロナ禍を超えて



現在も代表として予算獲得とともに国民の理解増進に努めています。このような活動をしつつも、本業の研究では世界を相手に戦う努力をして参りました。7年前に20名近くの研究室を京都に移動させましたが、この間京大医学研究科の皆様からは大変良くしていただきました。学内で多くの新しい共同研究も生まれ、充実した研究活動を進めることができましたことには大変感謝しています。その意味でも、京大医学研究科に恩返しをしたいと強く願っております。

く、またそれに皆が慣れてしまっているという状況は、研究科の運営に少なからぬ影響を与えていると感じています。

さらにこのような接触機会の減少の影響は若い世代においてより甚大です。特に学部学生は、大学に入学し、様々な活動を通じて、同級生だけでなく先輩、後輩、教員、そして社会と接する中で自己を確立していくのが通常ですが、その機会が損なわれてきました。

昨年より、医学研究科でも学生相談室を設置し、臨床心理士・公認心理師の方に問題を抱える学生の相談にあたっていた

コロナ禍後の再始動を見すえて、課題の解決を

現在、医学研究科が抱えている最大の課題はやはり「コロナ

現在、コロナ感染は全体として軽症化してきており、社会活動を元に戻すための動きが加速化していますが、コロナウイルスが完全に克服されたわけではありません。このような状況で、大学病院を抱える医学研究科としては、課題を逐一解決し、病院と連携して問題を克服し、活動を回復させていく舵取りが重要です。

口にされ、大変大事にされていることです。他学では必ずしもこうは参りません。それが意味する「自由」「自学自習」「独創性重視」の気風は確かに確固として根付いていますし、私自身も着任後、その恩恵を受けてきました。

一方で、そこには「ほったらかし」「他者への無関心」という側面もあり、京都大学は旧帝大の中で女性教員の比率が最も低く、さらに全学的には研究費不正の多さに悩まされています。

最後にありますが、京都大学医学部・医学研究科をさらに良くしていくために、私自身がどこまでできるのか正直に申しまして不安は少なからずございます。やはり皆様のご協力が必要です。私が学生時代に所属しておりましたボート部に譬えますと、人が揃わないと艇は出ませんし、艇を出せてもオールが揃わないと勝てません。芝蘭会会員の皆様にも今後様々な局面で協力をお願いさせていただきますことになるかと思いますが、何卒宜しくお願い申し上げます。

こういう状況を変えて、元来の「京大らしさ」を大切にしつつも「21世紀における京大らしさ」を追求する必要があると思います。そのためのキーワードは「異分野連携」と「多様性を尊重した人材育成への目配り」だと考えます。日本の国としての長期の停滞の原因は、人口減少とともに、新たなイノベーションが起こっていないことですが、同世代のトップクラスの人材が集う京都大学医学部・医学研究科としても、優れた医療人の育成とともに、医学・医療分野からのイノベーションの創出が求められていると思います。こうした流れを受けて、2019年に複数の関係部署の連携による卓越大学院のメディカルイノベーションプログラム（MIP）が立ち上がり、所属する研究室が研究発表と交流を行う「医薬系研究交流サロン」を開催してきました。現在コロナ禍で対面での実施ができておりませんが、相互理解の促進に大変重要ですので、さらに活性化させて参りたいと思います。

一方、医学研究科の内なる改革のため、岩井研究科長が「将来計画検討WG」を立ち上げられ、人事選考、大学院教育、予算などについての課題の洗い出しと改革案の提案が行われ、既にいくつかの改革が実行されつつあります。今期におきましても、研究科構成員の意見も集約しながら、さらなる改革を足元から進めて参りたいと思います。

関係病院との連携による体力強化を

京都大学医学部の関係病院は西日本に広く分布しており、京大関係の医師の育成、学生の教育の場として大変重要な役割を果たしていただいています。この数年間、岩井研究科長、宮本享病院長のリーダーシップのもと、京大病院と関係病院の現況についての相互理解を深め、連携関係を強化する努力がなされてきました。このような活動は京都大学医学部・医学研究科の足腰を支えるものですので、私の期になりましても、病院長とともに尽力して参りたいと思います。

関係病院との連携による体力強化を

京都大学医学部の関係病院は西日本に広く分布しており、京大関係の医師の育成、学生の教育の場として大変重要な役割を果たしていただいています。この数年間、岩井研究科長、宮本享病院長のリーダーシップのもと、京大病院と関係病院の現況についての相互理解を深め、連携関係を強化する努力がなされてきました。このような活動は京都大学医学部・医学研究科の足腰を支えるものですので、私の期になりましても、病院長とともに尽力して参りたいと思います。

新任あいさつ

Organizing chaos

（個々の多様性を互いに尊重し、いっしょに（ひときり）一致団結できるチーム）を目指して



京都大学大学院
医学研究科
侵襲反応制御医学講座・
麻酔科学分野 教授
江木 盛時

私は、2022年4月1日から京都大学大学院医学研究科侵襲反応制御医学講座・麻酔科学分野教授、京都大学医学部附属病院麻酔科科長、集中治療部長を拝命致しました江木盛時です。この紙面をお借りして芝蘭会会員の皆さまにご挨拶申し上げます。

京都大学麻酔科（現 京都大学大学院医学研究科侵襲反応制御医学講座・麻酔科学分野）は、1956年に初代教授の稲本晃先生が開講された伝統ある麻酔科学教室です。稲本晃先生に続き、1973年から森健次郎先生、1998年から福田和彦先生が教室を主宰され、麻酔・集中治療・ペインクリニックにおける臨床、教育、研究すべての分野で多くの実績を残し、これまで数多くの大学教授を含めた優秀な医療人を輩出し、社会に大きく貢献しています。伝統ある京都大学麻酔科の4代目教授を拝命し、身が引き締まる思いです。

私は、1999年に岡山大学医学部を卒業し、直ちに岡山大学麻酔科に入局し、岡山ろうさい病院、香川県立中央病院で研修致しました。その後、

2004年にオーストラリアのAustin medical centerに集中治療学と臨床研究の研鑽のために留学致しました。留学後の2006年に、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科に入学し、2010年に博士号を取得しております。岡山大学医学部附属病院および国立がん研究センター麻酔科での研鑽の後に、2014年より神戸大学医学部附属病院麻酔科で臨床、教育、研究における研鑽を続け、2022年に京都大学麻酔科に着任致しました。

このたびの教授就任にあたり、まず私が考えたことは、京都大学麻酔科の皆さん、京都大学病院の皆さん、そして京都大学病院の患者さんを何よりも大切にするということです。それぞれの皆さんが大切にしていることを教えていただき、自分の宝として、大切にしていきたいと思っています。京都大学麻酔科に受け継がれる信念や伝統は、その侵襲反応制御医学講座の名に表れていると言えます。手術や外傷、感染といった侵襲から患者を護り、またその侵襲によって生じる有害な生体反応から患者を護ることが麻酔科医の使命です。麻酔

科医は病院中央診療部門の要であり、より先進的医療を推進するためには質の高い麻酔の実践が必要です。そのためには、術前管理と集中治療を含めた術後管理を行う周術期管理学の実践が必要と考えます。一人でも多くの患者さんへ最高水準の医療を提供するため、豊かな知識、確かな技術、柔軟な対応力とチームをまとめるコミュニケーション能力を持った医療人の育成を目指して、診療、教育、研究を行って参りたいと思います。

京都大学麻酔科では、個々の多様性を大切にし、それぞれがのびのびと自由な環境で行動しながら、こそというときに一致団結して問題解決にあたるチームの力を大事にしたいと思っています（Organizing chaos）。このようなチームを維持するために、「Patients First」の気持ちをもつて診療に臨むこと、仲間の良い部分や目標をお互いに認めて尊敬すること、そして思いやりと助け合いの気持ちを持つことで、皆がそれぞれの目標に向かって自由に歩みを進めてもらえるようにしたいと思います。

最後に、私が今まで教えていただき、そして大切にしているモットーをお伝えしたいと思います。人生の価値は、受けた影響と与えた影響で決まる（教育が人生を変える）、縁が全て（人が大事、人とのつながりが大事）、おかれた場所で花を咲かせる（自身の居場所を愛し、大切にする）、Enjoy Yourself（どんな時も人生を楽しむ）。

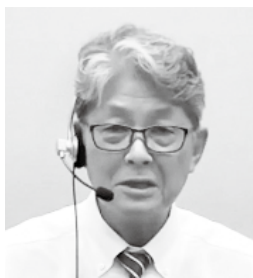
これまでの京都大学麻酔科の歴史と伝統を守りつつ、京都の地において多くの麻酔科医がのびのびと自由に学び育ち、そして活躍していける麻酔科学教室としてさらに発展し、患者様をはじめとする全ての方々のお役に立てればと考えています。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

第4回地域連携の集いを開催

「京大病院の未来への取り組み」をテーマに、3つの新センターの機能と展望を紹介



宮本 享病院長



松井道宣会長



森 洋一芝蘭会京都支部長

京都大学医学部附属病院は、京都府医師会、京都府立医科大学附属病院と共催で令和4年7月2日に「第4回地域連携の集い」を開催しました。地域医療の強化・推進のため、従来は芝蘭会共催で実施してきた「京大病院臨床懇話会」の発展形として、地域で活躍する医師及びコメディカルと京大病院との意見交換や情報提供を実施しています。

昨年度よりコロナ禍での開催ということでWEB会議システムを利用してあります。参加人数に制限がなく、また遠方からでも参加が容易であることから、院外158の医療機関から176名、京大病院から100名が参加する大規模なものとなりました。

当日は、初めに京大病院宮本享病院長と京都府医師会の松井道宣会長より挨拶がございました。引き続き、京大病院の地域連携担当である妹尾浩副病院長を座長として、全体テーマ「京大病院の未来への取り組み」と題し、京大病院に設置された3つの新しいセンターについて講演をおこないました。

初めに、初期診療・救急科の陣上直人助教より、「高気圧酸素治療センター」について最新型のHBO装置を用いた治療の実績や、スポーツ外傷へのアスリートヒーリングプランの導入などの新しい治療法の紹介がありました。

続いて耳鼻咽喉科・頭頸部外科の大森孝一教授より、関西圏では初めてとなる「摂食嚥下診

療センター」について説明がありました。同センターが摂食・嚥下に関する機能評価からリハビリテーション、外科的治療まですべて実施可能な国内でも数少ない施設であることが紹介されました。

最後に「脳卒中療養支援センター」について同センター長である宮本病院長より、開設の経緯や今後の脳卒中治療についての展望のほか、脳卒中療養相談士の育成や脳卒中相談窓口の設置など、連携により医療情報の共有だけでなく相談支援や説明内容の共有ができる取組が紹介されました。

講演後には、京都府立医科大学附属病院の夜久均病院長と、芝蘭会京都支部の森洋一支部長にご挨拶を賜り、盛会のうちに終了となりました。

芝蘭会費納入は自動振替で

平成17年度より芝蘭会費の納入方法として、「銀行口座等からの自動引き落とし」を採用させていただきます。会費納入のお手間が大幅に省かれ、また、会費の二重払いの防止にもつながります。ぜひ、ご利用いただきたくお願い申し上げます。

手続きについては、芝蘭会事務局までお問い合わせください。

芝蘭会事務局 TEL 075-751-2713 FAX 075-752-4015

ご注意

最近、芝蘭会員の方々へ芝蘭会員または京大医学部事務職員の名前をかたって、個人情報（住所、電話番号等）を聞き出そうとする不審な問い合わせの電話があるということを会員の方からご連絡をいただいております。芝蘭会とは全く関係がございません

ので、くれぐれもご注意くださいますようお願いいたします。

なお、芝蘭会では会員の方から住所変更等のご連絡がない限り、事務局からはお問い合わせはいたしておりません。ご不審なことがありましたら、芝蘭会事務局までご連絡ください。

芝蘭会事務局 TEL ● 075-751-2713 FAX ● 075-752-4015

京都府医師会・京大病院共催

地域連携の集い ～京大病院の未来への取り組み～

2022年7月2日(土) 15:00～17:00 Web開催 (Zoom)

15:00～15:05	病院長挨拶	宮本 享 病院長
15:05～15:10	京都府医師会長挨拶	京都府医師会 松井 道宣 会長
15:10～15:40	高気圧酸素治療室から高気圧酸素治療センターへ ～アスリートヒーリングプランの開設を目指して～	高気圧酸素治療センター副センター長 陣上 直人 助教
15:40～16:10	京大病院摂食嚥下診療センターの開設と今後の取り組み	摂食嚥下診療センター長 大森 孝一 教授
16:10～16:40	脳卒中療養支援センターについて	脳卒中療養支援センター長 宮本 享 病院長
16:40～16:45	来賓挨拶	京都府立医科大学附属病院 夜久 均 病院長
16:45～16:50	来賓挨拶	一般社団法人芝蘭会 森 洋一 京都支部長
16:50～16:55	閉会挨拶	妹尾 浩 副病院長

高気圧酸素治療装置(多人数用)

アスリートヒーリング

摂食嚥下診療

脳卒中療養支援センター

ご参加は無料です。事前登録制のため、裏面よりお申込みをお願いします。



京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金

(KMS-FUND) だより

〒606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学研究科事務部
総務企画課企画広報掛
TEL 075-753-4695
075-753-4322
FAX 075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.
med.kyoto-u.ac.jp

2018 (平成30) 年
医学部キャンパスツアー
(IPS 研究所前で撮影)

創立125周年の記念式典に参列して

京大のエネルギーと ポテンシャルを再確認



校友会会長
新屋明美



春には新入会員のみなさまを対象

京都大学創立125周年、まことにおめでとうございます。校友会会長として、この記念式典に参列することができたことを光榮に、そしてありがたく思っております。京大というのでしょ、京都大学の持つ不思議な魅力と力、今までとこれからへの輝きに触れることができました。

校友会は、京都大学医学部と大学院医学研究科の教育の充実と研究の発展、そして主に学生の保護者からなる会員、学生、教職員の親睦を図ることを目的として設立されました。令和4年6月末の段階では864名の方がご入会されています。私も10年前に娘の入学を機に、校友会に入会させていただきました。30年前、私自身も京大病院で診療に携わっていたことがあり、当時の恩師の先生方、雲の上のように感じていた先生方と、和やかに話していただきた、感動したことを憶えています。

春には新入会員のみなさまを対象としてキャンパスツアーを行っています。秋の校友会総会では、優れた活動をしている医学部クラブに対して校友会賞を授与し、京都大学ゆかりの先生のご講演を拝聴しています。また入学式や卒業式では祝賀会を開催し、校友会からの記念品を一人ずつ授与しています。さらに京都大学医学部教育研究支援基金 (KMS-FUND) の拡充支援のお手伝いも行っています。

こうした校友会の活動のなかで、なにより一番うれいのは、校友会総会などで世界的な研究者である先生方からお話を聴くことができ、直接お話しできる機会があることではないでしょうか。ノーベル賞級の世界最先端の研究のお話を、わかりやすくかみ砕いてお話しいただき、ありがとうございます。

6月18日の式典当日、会場となった岡崎のロームシアター京都の周辺はとても賑わっていました。京都大学関係者だけでなく、通りすがりの人々も、会場の賑わいに誘われて気軽に足を運んでおられたように感じました。この雰囲気こそが京大の力と、京大らしい、ちょっと緩い和やかな雰囲気を感じる素晴らしい記念式典でした。式典の司会を卒業生でもあるアナウンサーの野村正育様が務められましたが、その最初の言葉「京都の街が薄いベールをかぶった姿で迎えてくれました。…」は、京大の雰囲気そのものを現しているように感じました。京大が持つエネルギー、ポテンシャルは、京都のはんまりとした雰囲気と覆われていますが、計り知れないものと思います。

これからの京都大学の益々のご発展をお祈り申し上げますとともに、その発展に少しでも尽力することができればと思っています。



KMS-FUND の
活動紹介パンフレット

令和3年度卒業生代表あいさつ 試練の時代にこそ 考え続ける章となる

阪上 嶺



令和4年3月24日、前年と同様に規模を縮小した形で本年度の卒業式が執り行われました。桜の蕾が大きくふくらみ、春の麗らかな陽光が降り注ぐ素晴らしい日に旅立ちの時を迎え、新たなスタートを切ることができ大変嬉しく思います。また卒業の日を迎えるにあたり、湊総長、岩井学部長をはじめ、教職員の皆様方にご臨席を賜り、御心のこもった励ましの言葉を頂いたことに、卒業生一同より心から御礼申し上げます。

私たちの大学生活は、振り返ればあつという間の、しかし濃密な6年間でした。入学当初は新しい学問の世界に飛び込むことへの緊張と期待で胸がいっぱいでした。いざ京都大学での生活を始めてみると、あらゆる分野の世界的な研究者に師事できる、学年に関係なく自分の好奇心を追求する仲間に出会える、学問を求めた学生には必ずその機会が用意される、素晴らしい機会が用意されることを実感しました。そのような環境で先生方のご指導の下で大いに学び、かけがえのない友人たちと切磋琢磨することができたのは、まさに幸運で代え難い経験です。

私たちが学生生活最後の2年間は新型コロナウイルス感染症と共に在りました。通常であれば5年次の4月から病院実習が始まり、6年次には計14週にわたってイレクティブ・コースを受講し、臨床・基礎を問わず、さらに海外の病院でも希望する分野の実習を行える予定でした。しかしながらパンデミックにより行動規制が実施され、病院実習の開始は約3か月延期となり、学外病院での実習は多くが中止、イレクティブ・コースは半分ほどの期間に縮小され留学は不可能となりました。医学生として勉学を積み重ね、自分の究めた分野が徐々に固まる者も多いこの時期に、国内外の医療機関や研究機関での学びの機会が十分に得られなかったことは残念でなりません。

されいる現在、医療従事者の果たす役割は一層大きなものになっています。4月から私たちもその一員として、一人ひとりの生命を守ることに全力を注ぐべく、努力を続けていくことを誓います。それに加えて、世界の出来事を注視し、自分が未来の歴史を形作っていく、まさに当事者であることを常に意識するべきだと痛切に感じました。

しかし一方で、オンライン授業や学生向けの解説が付いたwebカンファレンス、ポータルエコの貸し出し等新しい手法が取り入れられ、ある面では確実に以前より充実した実習を受けられたように感じます。私たちのために、困難な状況の中よりよい学びを得られるよう調整を続けてくださった、京大病院や関連病院、医学教育担当の諸先生方には感謝してもしきれません。私もこの2年間はカリキュラム委員として、学生の実習に対する希望や提案を取りまとめ、医学教育・国際化推進センターの先生方と密に意見交換を行い、コロナ禍での病院実習の形について模索しました。卒業後もこの経験を忘れず、どんな状況下でも積極性を持って医療と医学に向き合い、研鑽を積んで参ります。

最後に参りましたが、本学でのご指導・鞭撻をいただきました先生方、職員の皆様、様々な面から大学生活を支えてくれた家族、温かく見守ってくださった全ての方に感謝と御礼を申し上げます。そして、京都大学医学部ならびに校友会の益々のご発展と、皆様方のご健勝を祈念いたしまして、卒業生代表の言葉とさせていただきます。

今、世界は新型コロナウイルスの猖獗だけではなく、別の難局にも見舞われています。2月末より始まったロシアによるウクライナ侵攻は、これまで世界で醸成されてきた脱帝国主義、多様性の尊重といった進歩的な歩みを一気に逆行させようものとした。人権と人命が危機に晒

支部だより

岐阜

「2022年

岐阜支部総会」の開催

令和4年6月12日（日）に芝蘭会岐阜支部総会が開かれましたが、今回はオンラインでの開催となりました。

はじめに清水克時支部長の挨拶があった後、富田栄一常任理事の司会で、京都大学医学部医学科臨床神経学教授の高橋良輔先生のお話がありました。高橋先生は、まず京都大学の最近の状況について報告をされ、続いて「パーキンソン病―病態解明と治療の進歩」というタイトルで、パーキンソン病（以下PDとします）の病態解明と治療における最新の知見をご講演いただきました。

まず、本講演で高橋先生が特に強調されていた5つの論点を先に皆様に共有いたします。

- ①疾患の経過を薬物治療で緩徐化するため、PD発症前の前駆期の解明が進められている。
- ②下位脳幹・嗅球からPD病理が連想的に向上してくることからαシヌクレイン伝播説が注目されている。
- ③PD薬物療法における運動合併症（ウェアリングオフ、ジスキネジア）の予防・治療に持続的ドパミン刺激の実現が目指されている。
- ④従来の薬物治療の他、デバイス補助療法として脳深部刺激法、Lidopa持続経腸療法が利用可能である。
- ⑤根治的治療として今後は

iPS細胞移植や遺伝子治療の臨床応用が期待される。

講演の中で私自身が特に関心をもったのは、1つ目の疾患経過の緩徐化です。PDは振戦、筋強剛、寡動、姿勢反射障害といった症状が知られていますが、実は、これらの症状が出現する前の前駆症状が存在することが最近の研究で判明してきました。これらPDに特徴的な症状は、中脳黒質ドパミン神経細胞が50%死滅した時点で出現するとされていますが、実は症状出現の20年ほど前から神経変性自体は始まっており、その途中で便秘、嗅覚低下、睡眠障害、抑うつといった一見非特異的な症状が出現するというのです。

現在の薬物治療ではPDの根治は難しいですが、前駆期の時点で確定診断をつけて治療を開始することができれば、より多くのドパミン神経細胞を温存し、振戦等の特徴的な症状の出現を遅らせることができるといえます。しかし、PDは中高年者に多い疾患であるため、便秘、嗅覚低下、睡眠障害、抑うつといった症状だけでなく加齢による体の調子の変化と見過ごされてしまいそうなものです。

その他にも特発性REM睡眠行動異常症という症状があり、この症状がみられる患者の80%が10年後にPDやPD類似疾患を発症するという研究結果があります。こちらは睡眠中「夢の内容が行動化」するため、寝言や叫び、殴り、蹴りといった行動がみられるというもので、流石にここまで症状があれば同居人に発見してもらえそうなものです。

いずれにせよ、PD発病までの前駆症状にはさらなる解明余地があることは確かです。PDはQOLを著しく下げる疾患としても知られていますから、少しでも疾患経過の緩徐化が可能になることを願っております。その他にも、αシヌクレイ

ン伝播仮説に基づいたPDの新しいサブタイプとして、BRAINFIRSTPD

（脳で生じたαシヌクレインが骨盤神経や迷走神経を順行性に伝播し腸管に到達する）やBODYFIRSTPD（腸管で生じたαシヌクレインが骨盤神経、迷走神経を逆行性に伝播し、脳へと到達する）が存在するという大変興味深いお話もありました。さらには、迷走神経切断によってPDの発症リスクが実際に低下するという興味深い研究結果もあるようです。普段は国家試験対策で大量の情報の暗記に追われる私たち学生にとって、非常に楽しい時間となりました。

そして最後に、京大病院で2018年より始まったPDに対するiPS細胞移植治療のお話がありました。2022年12月までに移植手術が全例終了する予定で、有効性が期待できるとの説明があり、講演は終了となりました。

（文責・6回生 吉村太貴）

阪神

「2022年芝蘭会阪神支部総会・医療懇話会」の開催

令和4年6月11日（土）、都ホテル尼崎にて、2022年芝蘭会阪神支部総会・医療懇話会が開催されました。今回は対面とオンラインでのハイブリッド開催であり、3年ぶりの開催となりました。

はじめに、阪神支部長である平家俊男先生より挨拶と会計報告があった後、監事の永井朝子先生より監査報告がありました。次回の総会・懇話会は2023年6月10日（土）もしくは2023年6月17日（土）の予定だとの報告がありました。続いて、5つの興味深い講演がありました。

ました。

本来ならば、講演終了後に情報交換会があるはずだったので、コロナ対策としてやむなく中止となり、先生方は残念そうでした。平家先生をはじめとする先生方が学生にも優しく喋りかけてくださいました。最後にはなりましたが、このような会にお招きくださったことへの感謝の意をもって阪神支部の報告を終わらせていただきます。（文責・2回生 山本誠）

R4.5.1	常田 裕子	採用	京都橋大学非常勤講師 ➡ 先端広域看護科学周産期疫学准教授
R4.5.1	油谷 暁	配置換	医療情報企画部特定講師 ➡ 医療DX教育研究センター医療データ基盤部門特定講師
R4.6.1	神 由里	採用	日本医科大学附属病院看護掛長 ➡ 先端中核看護科学クリティカルケア看護学准教授へ
R4.6.30	後藤 慎平	辞任	呼吸器疾患創薬講座特定准教授 ➡ iPS細胞研究所臨床応用研究部門教授
R4.6.30	瀬尾 智	辞任	肝胆膵・移植外科学准教授 ➡ 京都桂病院外科部長
R4.6.30	溝田 敏幸	辞任	麻酔科学講師 ➡ 手術部准教授
R4.6.30	田中 具治	辞任	手術部准教授 ➡ 兵庫県立尼崎総合医療センター麻酔科部長
R4.8.1	長井 和之	採用	肝胆膵・移植外科特定病院助教 ➡ 肝胆膵・移植外科学講師

訂正とお詫び

芝蘭会報第199号1頁の「令和元年度 春の叙勲」の記事に誤りがありました。

同姓同名の非会員の「森下 一」様を間違って掲載しましたため、「瑞宝中綬章 森下 一（昭41年卒）元国立病院機構高知病院長」を削除します。

会員ならびに関係者の皆様には、大変ご迷惑をおかけいたしました。謹んでお詫びいたします。

事務局から
平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報報の取り扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては、会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはFAXにより事務局までご送付ください。電話でのお問い合わせにはお答え致しかねますので、ご了承ください。
FAX 075-752-4015

原稿募集

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場であり、支店活動、クラス会、会員の著書の紹介（自薦・他薦）及び医学・医療等に関するご意見等を寄稿ください。なお、送付先はFAX(075-752-4015)またはEmail(Info@shinkai.or.jp)をお願い致します。また、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会が決めています。ご了承ください。

芝蘭会報編集委員会

委員長 高折晃史
委員 中村保幸、吉岡秀幸、清川岳彦、園部誠、松村由美、甲斐亜沙子、諫田淳也
芝蘭会雑誌部
顧問 高折晃史
部員
（6回生）岡和来、西村健太、秋宗俊久、原明弘、森田瑛、吉村太貴、樺井良太郎、濱田草太（5回生）奥野芳樹、青木ちひろ、福井貞孝
（4回生）三宅大河、小林空暉、小澤向陽、野洲春菜
（3回生）大島輝
（2回生）福田大智、反田武志、山本誠
（1回生）奥村圭一郎、田中春輝

芝蘭会事務局
事務局長 山田均
管理課長 森勝二
秋山和美

制作協力 京都通信社
デザイン 納富進

人事異動

会員計報